

せんしよくか
染織家である志村ふくみさんのエッセイの中に、次のようなエピソードが紹介されています。

志村さんは、染め物の染料を、さまざまな植物の花や実、葉や幹、根っこなどからつくっているのですが、ある時、桜色の染料をつくろうと思い立ち、桜の木を探していました。

やがて、粉雪の舞う頃、京都の小倉山の麓で桜の木を切っている老人に出会い、枝をもらってきました。早速、その枝を煮出して染めてみると、ほんのりとした^{かばさくら}樺桜のような桜色に染まったそうです。

志村さんが、桜の枝をもらってきたのが、粉雪の舞う頃ということですから、当然桜の花は咲いていません。^{つぼみ}蕾にもなっていない状態でしょう。

志村さんが染め出したのは、桜の花びらではなく、桜の枝です。桜色とは似ても似つかない木肌の枝から、桜色が浮かびあがってきたのです。

これはどういうことでしょうか。

桜の花は、花の部分だけで咲くではありません。花が咲く前に一つの木が全身で、枝先の花を咲かせようとするのです。そうでなければ、枝から、桜色があらわれることはないのではないのでしょうか？

道元禅師のことばに「^{しんじん こ}身心を拳して」というものがあります。「^{み ところ}身と心すべてを^{かたむ}傾けて」といった意味になるのでしょうか。

まさしく、桜の木は「^{しんじん こ}身心を拳して」花を咲かせるのです。冬に桜の木が、その内側で全身を桜色に染めているさまを想像してみてください。枝先の小さな花を咲かせるために、全身全霊で、身を花の色に染めているその様子を・・・

桜の木が、これまでと違った姿に見えてきませんか？

そして、桜にとっての花が、私たちにとっては、語る言葉であり、^{ただす}佇まいであり、生き方であるならば、はたして、桜のように、「身心を拳して」それらをなしているかどうか。

そのように自らを^{かえり}省みるきっかけを、これまでと違った姿を見せる桜の木が、

私たちに与えてくれるかもしれません。

— 終 —